

東電の下請けで働く労働者

避難先にいたTさんののもとに

三号機爆発の後 “出勤の命” が届く

彼はこれを「赤紙が来た」と言う

「明日から現場は“人海戦術の海”になる」

「あ、おそらくは死ぬんだろうな……」

「明日は死ぬと知ってて

覚悟を決め出撃していった特攻隊員で

こんな気持ちだったのでは……と

「気持は重かった」と彼は言う

次の日 放射能の吹き荒れる嵐の現場に向かう  
防ぎようがないと分っていても

防護服 全面マスクをつけて仕事場へ……

「今日はたったの二〇分

駆け足で作業しただけ……」 (中略)

過去あちこちでの原発で働き

今は盲目のYさんは口が重くトツトツと

「俺の目は原因不明

今の“医学”をしてさえ見放された」

「癌になったり 死んだりした 死ぬのも

ケガをしても みんな自己責任だ」と言う

“生きるため”とはいえ 選ばざるを得なかった

この世界はケガと弁当は自分持ち

よほどでない限り会社も労災もソツポを向く

医者だって 放射能との関連には口を噤む

そして「死の淵」をさまよっている

大勢の人々がいる

3・11以前も 以後も “原発”の塲の中には

どこからとも知れぬ漏れ出した放射能は

労働者たちの体を蝕みボロボロにする

これも人災だろう塲の外には

たくみに隠されていた

原発を守ろうとする

原子力村の怖い話である

3・11の13・1mの津波は

6mの波防壁をもろともせず (中略)

利益ばかりを追いかけて

虚構の“安全神話”の上にあぐらをかいた

慢心が招いた“油断”が

福島破壊という未曾有の

“人災”を招いてしまった

人が造るものは必ず壊れる

完全なんてあり得ない

新しいものも古くなり崩壊する

原発事故の重い教訓であったのに 事故究明も

悪夢消えやらずという今も

国や電力業界は

懲りずに再稼働のチャンス到来を

ジーツと待ちかまえている

節電 料金値上げ攻撃の裏には

“原発再稼働” “原発増” など

弱い者いじめをよく知っている

彼らのずる賢い手の中が見え隠れする

うっかり手の中に入れてしまうと

子どもや孫たち その先々までも

危険の先送りをすることになる

許されぬことです 許すわけにいかないヨナク

とは言っても通じる相手ではない

太刀打ちしようにも 素手と一票だけでは

と黙している

“泊”だって

福島の二の舞を踏まぬとは限らない

「伊達」にだって 黒い雨は降るだろう

やっぱり再稼働はあってはならぬ

そうか 文字の力を借りよう

思いの文を “言葉” の力を借りて

大声で叫んでもらおう

人の力では制御しきれない原発は廃炉にしよう

原発で手を汚した罪深き人たち

福島の悲痛な叫びを 大多数の国民の声を

聞いてください

命と 大地を 海を

死に追いやることはやめよう！と

## 二つのりんご

黒田孝

私はオホーツク大空町(旧女満別)の開拓畑作農家に生まれた。

戦後間もない一九四七年二月、私が五歳のとき。

祖父母が雪の中を馬そりで街まで出かけた。当時、冬の道は吹雪で消えてしまい、除雪はしないから、片道六キロだが苦勞しての行き帰りだったそう。

夕方、祖母が一個のりんごを持ち帰った。青いりんごだった。街中ぐるぐる回って、ようやく譲り受けたりんごだと、祖母が話していた。

父が結核で最期を迎える日だった。戦争で、中国から帰還したとき、結核を発病していたという。母にも感染、三カ月前に、亡くなっている。母とは隔離されていたから記憶にない。

祖母が父にりんごを食べさせようと、青いりんごの皮をむいた。りんごの皮を私にくれた。板張り壁の隙間から寒い風が吹き込んでいた。薪ストーブにかじりついて、リンゴの皮を少し食べたが、りんごの味はなかった。

なんでもいいから栄養のあるものを食べさせたい。そんな祖父母の祈りに近いものがあつてのことだが、父はそのりんごを食べることなく、この世を去った。こんな悲しいりんごがあつたのだ！

「こんなことになるんだたら、戦争で死んでくれたほうがなんぼかよかつたのに！」が、その後の祖母の口癖のようになった。かなりの年月が経って、私が結婚したころ、太平洋戦争で死んだ兵士の大半は餓死と病死だと知って、父の死は戦死と同じだと気付いた。学校で太平洋戦争のことは一度も教えられたことがなかったからか……

私が一〇歳になったとき、祖父母と父の弟、叔父が離農し、街で米屋を始めた。そのときから、うちは貧乏な生活から抜け出したように思った。食べるものも、着るものも変ってきた。

その当時、股旅ものの芝居が回って来て、いつも大入り満員だった。祖母は唯一の楽しみだった芝居に私を連れていった。役者さんが動くたびに掛け声がかかって賑やかだった。そして、「お捻り」が飛んだ。悪役が登場、祖母は興奮の絶頂で、悪役に向かって

叫びながら、持て来たりんごを投げた。真っ赤なりんごが舞台の上に転がった。「恥ずかしい」その後の芝居の展開は全く覚えていない。寝小便をした時と、この芝居の時ほど恥ずかしく思ったことがない。祖母は「物を投げるくらいの方が役者さんは喜んでくれるのさ。」と平然としていた。これは笑えるりんごだった。

祖母には父のりんご芝居のりんごが結びついていなかった。かなり後になって「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」とはこのことだと何度となく思い出していた。

祖母は商人としては凄腕だった。お客の機嫌をとっては商いをし、借金取りが来たら、うまいことを言って追い返していた。「口のうまいばあさん」だった。

親がなく、勉強も出来ず、病弱で病院通いの多かつた私を大学にまで入れたということで、街の評判になり、祖母は町の教育委員をさせられていた。

波瀾の中で生きた祖母も、死を迎えた時は静かに息を引きとった。「外が見たいー」それが最後の言葉だった。ベッドから祖母の体を起こしたのが私のたった一つの親孝行だったようだ。おそらく天国への夢を見ていたのか……夏の澄み切った青空だった。

太平洋戦争をはさんで、貧困と私の父母を同時に失う苦難を乗り越え、親代わりに孫を育て、たくましく生き抜いた祖母の話である。

(2008年筆) 今回一部加筆

子どもの頃、親がないこと、病弱なことを祖母や親せきなどから、いつも言われ続けて、なんだか自分ですべて悪いような気がしていた。ネガティブなものの見方をしていたのはそのせいかもしれない。今も絵を描くと、それは変わらない。私の創作はきれいに描く、美しく描くというより、「自分の思い」を描くことが多いのです。一般的には社会派の絵かきと言われます。

今日では表現活動は自由なものになりました。10人いれば10通りの作品が出来るのが当然のことです。ところが、70年前は大人にも子どもにも戦争画が強要されていました。

今、国会議員が「憲法を変えろ」の大合唱。私には表現の自由を抑圧する声に聞こえるのです。